

04 淀川ヒューテック

成長ビジネス

- 独自のロータリー(回転)方式を開発
- 貼り付けが簡素化でき、3つの工程を同時に実現
- 生産時間を短縮できるため、顧客は導入台数を減らせる



れた。付き添いの親たちも、子どもたち以上に熱中していた(村井社長)。あるデザインの見本市に出席した際には、高齢の女性たちから熱心に質問を受けた。ファン層は村井社長の予想を超えて広がっている。

03 五光発條



ばねで作り出す アートなブロック



ばね製の帽子をかぶる村井社長(上)。ばねを組み立てて作ったネコ(右)

ばねのよさを知らずに死ぬのはもったいない

日本のものづくりを支える「ばね」のメーカーでも、胎動がある。1個1円以下のばねを、新感覚のホビー商品へ生まれ変わらせたのだ。ばね製造の五光発條(神奈川県・横浜市)は典型的な中量産の町工場。71年の創業で、現社長、村井秀敏氏の父が立ち上げた。同業の約5倍という生産スピードを強みに、自動車やゲーム機向けの特種ばねの製造で、年間約18億円を稼ぎ出す。しかし、ばねは機械さえあれば誰でも造れる。生産はアジアへと移転

していった。日本メーカーの海外進出につれ、五光発條もタイとベトナムに工場を建てた。旺盛な需要を背景に、2工場はフル稼働だ。一方の国内は、00年代に入ったころから需要が冷え込み始めた。めぼしい量産品目は今やデジタルカメラ向けくらいだ。横浜と山梨の工場には計50人が働いている。村井社長は、「どうすれば日本ではばねを造り続けられるだろうか」と考え込むこ

とが多くなっていった。町工場の製品開発コンサルティング、enmono(エンモノ)と出合ったのは一昨年のことだった。エンモノの三木康司代表から「ワクワクするものづくりとは、自分が欲しいものを作ることだ」と言われ、はっと気づいたという。幼い頃から町工場が身近にあった村井社長にとって、ばねは遊びの道具。組み立て玩具レゴブロックのよ

うに、ばねを使って動物などを組み立てていた記憶がよみがえった。「ばねを触る心地よさを味わわずに死んでいくのはもったいない」。村井社長の熱い話しぶりに、三木代表からも、「ばねブロック」事業にゴーサインが出た。ばねは強度や形を少し変えるだけで感触が劇的に変化する。硬すぎると組み立てづらいが、軟らかすぎると強度が出ない。絶妙な硬さが出るまで試作を繰り返した。ネコやカエル、帽子、ネクタイ、名刺入れと、あらゆるものをばねで作った。反響はすでに得ている。

今年6月から2カ月間、エンモノが運営するクラウドファンディングのサイト、zenmono(ゼンモノ)で資金調達をした。ばねブロックに共感したサポーターが数千、数万円を支援すると、ばねブロックの組み立てキットや完成品が送られるという仕組みだ。商品にニーズがあるかどうかの試験も兼ねている。村井社長は55万円の調達に成功した。9月中旬からはウェブサイトをなどで1000〜5000円のばねブロックのキットを数種類販売する予定だ。この夏休み、ばねブロックは小学生向けのワークショップに採用された。村井社長が講師となり小学生に面白さを伝えた。「いったん理解すると、ものすごく集中して作ってく